

アシュヴァゴーシャからヴァスバンドゥへ

——釈軌論と俱舎論に見る法滅観と馬鳴の詩作品——

上野 牧生 松田 和信

1. はじめに

『釈軌論 (Iyāḥkyāyukti)』の最終第5章と『俱舎論 (Abhidharmakośa)』の結びにおいて、ヴァスバンドゥ (Vasubandhu, 世親) は「正法の衰滅 (saddharmavipralopa, 法滅)⁽¹⁾」に直面する危機意識を吐露する。出家者の衰退が在家者に累を及ぼし、ブッダの教えがまさしく死に瀕しているとの危惧と、そうした状況下にあるからこそ、ブッダの教えを学び伝えねばならぬとの自覚が示される。いわば世親の法滅観であるが、実はそれには典拠がある。

複数の偈を提示して『釈軌論』に示される法滅観は、紀元2世紀のアシュヴァゴーシャ (Aśvaghōṣa, 馬鳴) に帰せられる、40種の三啓経 (tridaṇḍa) を集めた『三啓集 (Tridaṇḍamāla)』を構成する第29三啓経の偈にその典拠が見出される。さらに驚くべきことに、同じ法滅観を述べる『俱舎論』最後の偈自体も同じく第29三啓経の中に確認できる。三啓経の偈は、元は馬鳴の失われた『莊嚴経論 (Sūtrālamkāra)』の偈であった可能性が高いが、『釈軌論』の末尾にその『莊嚴経論』が名前を挙げて引用される点も考慮すれば、世親初期の二大著作には馬鳴に由来する偈がそのまま終幕に置かれた可能性も見てこよう。二人は中インドのアヨーディヤを活動の拠点としたとも伝えられる。教団としてはいずれも説一切有部に属したと思われる二人には、何らかの共通する思想的系譜あるいは基盤があったのではないか。少なくとも、世親が馬鳴の詩作品を知悉して自己の著作活動を行ったことは間違いないように思われる。本稿では『釈軌論』と『俱舎論』に見られる馬鳴の詩とその痕跡を指摘し、世親 (ヴァスバ

ンドウ)の背後に見える馬鳴(アシュヴァゴーシャ)の存在を明らかにする。

2. 釈軌論における世親の法滅観

『釈軌論』の最終第5章⁽⁴⁾、なかでもその第2節⁽⁵⁾には法滅を主題とする3つの小節が認められる。そこには5つの偈が提示され、それを世親が解説する形で法滅観が示される。偈の本来の作者について、世親はもとより、『釈軌論』の注釈者グナマティ(Guṇamati, 徳慧)も全く言及しない。出典への言及がないのは、その必要がないほど自明であったからか。結論を急がずに、まずその5偈と解説を紹介する。便宜的に5偈を[A]から[E]と表記するが、[A]は『釈軌論』第5章2.28節(VyY 5.2.28)に提示され、[B][C]はそれに続く2.29節(VyY 5.2.29)に2偈連続して提示され、[D][E]はそれから少し離れた2.42節(VyY 5.2.42)に2偈連続して提示される。

《第1小節》

[A] | (1) nyan pa'i skye bo dag ni phal cher phyir phyogs dang |

| (2) yongs su 'dzin par byed pa phal cher 'das pa dang |
⁽⁶⁾ ⁽⁷⁾ ⁽⁸⁾

| (3) nyes par rnam par bshad pa dag gis (4) mthu bcom pas |

| deng sang legs par bshad pa mthar gyur to |

tshigs su bcad pa 'dis ni deng sang phyogs gnyis la sangs rgyas kyi bstan pa yongs
su nyams pa rnam pa bzhi dang | nub la thug pa nyid du ston pa yin no ||
⁽⁹⁾ ⁽¹⁰⁾

(1) nyan pa'i skye bo dag ni phal cher phyir phyogs dang || zhes bya bas
ni khyim pa'i phyogs la nyan pa yongs su nyams par ston pa yin te | de dag ni phal
cher nyan pa po yin pas so ||

(2) yongs su 'dzin par byed pa phal cher 'das pa dang || zhes bya bas ni
rab tu byung ba'i phyogs la 'don pa yongs su nyams par ston pa yin te | de dag ni
phal cher yongs su 'dzin par byed pa yin te | thos pa 'dzin pa'i phyir ro ||
⁽¹¹⁾ ⁽¹²⁾

(3) nyes par rnam par (P145a) bshad pa dag gis zhes bya bas ni de nyid la
don bshad pa yongs su nyams par ston pa yin te | don log par 'chad pa'i phyir ro ||
⁽¹³⁾

(4) **mthu bcom pas** || zhes bya bas ni rtogs pa nyams par ston pa yin te | gang gi don du ste | dge slong gi tshul gyi 'bras bu rtogs pa'i don du bshad pa ste | de nus par mi byed pa'i phyir ro ||

'di ni mdor bsdu⁽¹⁴⁾ na yongs su nyams pa rnam pa gnyis su 'gyur te | tshig dang don gnyis kyi lung yongs su nyams pa dang | rtogs pa yongs su nyams pa'o ||⁽¹⁵⁾

gzhan yang (1) nyan pa'i skye bo phyir phyogs pa nyid dang | (2) yongs su 'dzin par byed pa phal cher 'das pa nyid kyis ni thos pa yongs su nyams pa yin la | (3) nyes par bshad pa nyid kyis ni yang dag par bsam pa yongs su nyams pa yin no || (4) mthu bcom pa nyid kyis ni yang dag par bsgom pa yongs su nyams pa yin no ||

deng sang legs par bshad pa mthar gyur to || zhes bya ba ni nub la thug pa nyid du ston pa yin no ||

de ltar sangs rgyas kyi gsung ni yongs su nyams pa dang yun ring du mi gnas par rig par byas nas ji srid du cung zad lus pa (D125a) de srid du 'di mnyan pa dang gzung ba dang don mthun par bsgrub pa la dad pa can rnam⁽¹⁶⁾ kyis rab tu 'bad par bya'o ||⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾

[A] (1) [ブツダの教えを] 聴く者たちは概して背き, (2) [ブツダの教えを] 保持する者 [たち] は概して過ぎ去り, (3) [ブツダの教えを] 間違って解説する者たちによって (4) 力が破壊されたことにより, 現在 (**deng sang**), [ブツダの] 善説は死に瀕している。

【第1 解釈】 この偈によって, 現在, 2つの側 (在家者と出家者) における仏の教えの4種の衰退と, [ブツダの教えが] 滅没 (nub pa, 日没) に瀕していることが示された。(1)「聴く者たちは概して背き」とは, 在家者の側 (*grhipakṣa) で聴き手が衰退したことが示された。彼ら (在家者たち) は概して聴き手だからである。(2)「保持する者 [たち] は概して過ぎ去り」とは, 出家者の側 (*pravrajitapakṣa) で暗誦 [者] が衰退したことが示された。彼ら (出家者たち) は概して [教えを] 保持する者である。聞いたことを保持するからである。(3)「間違って解説する者たちによって」とは, その同じ

〔出家者の側〕で意味を説く者が衰退したことが示された。誤った意味を解説するからである。(4)「力が破壊されたことにより」という〔語〕によって、証(*adhigama)が衰退したことが示された。何のための〔力が衰退したの〕か。沙門果の証得のための説明〔の力〕が、である。〔現在、出家者の側では〕それが不可能だからである。以上、まとめれば2種の衰退となる。言葉と意味の、教(*āgama)の衰退と証(*adhigama)の衰退である。

【第2解釈】さらに別〔の解釈〕では、(1)聴き手の背反と(2)〔教えを〕保持する者が概して滅し去ったことにより、〔正しい〕聞(*śruta)が衰退した。(3)間違って解説されたことにより、正しい思(*cintā)が衰退した。

(4)〔間違って解説する者たちによって〕力が破壊されたことにより、正しい修(*bhāvanā)が衰退した。「現在、〔ブツダの〕善説は死に瀕している」とは、滅没に瀕していることが示された。

【まとめ】以上のとおり、ブツダの教えが衰退し、永くは存続しないと知って、わずかに残されたその限り、これを聞き、保持し、内容のとおり実践することに、信あるものたちは努めるべきである。

(VyY 5.2.28, D shi 124b1-125a1, P si 144b5-145a6)

世親はこのように、在家者と出家者の双方において仏教が衰退し、仏教が死に瀕しているとの法滅観を示す。ここでは、語り手の頽勢が聴き手に累を及ぼし、在家者に向けて誤った解説をする出家者が増えたとの危惧が吐露される。「沙門果の証得のための説明の力」が現在の出家者になく、それが「不可能」とまで断言される。特に注目すべきは、法滅の要因が端的に出家者の衰退にあるとされる点であろう。教(āgama)と証(adhigama)から成る「正法」の担い手たちの衰退が法滅の要因であると明言されている。この点こそが『釈軌論』に示される法滅観の基調でもある。

《第2小節》

[B] | deng sang thub pa'i gsung ni smra bar byed pa'ang nyung |
(19)
 | dngul dang gser du 'byed par 'gyur ba'ang nyung bar gyur |

| de ltar lung dang rtogs pa dag la 'bad zhan pas |
| sangs rgyas nyi ma mthar phyin dri ma med 'di nub |

[C] | de lta bas na ji srid thams cad ma nub pa |
| de srid ji bzhin don rnams dbye la 'bad par gyis |
| thub pa'i gsung gi snang ba nub par gyur na ni |
| 'gro ba kun tu mun pa gcig pu'i thibs por 'gyur |

de lta bas na ji srid du mun pa gcig pu'i thibs po mi 'byung ba de srid du yang dag
pa ji lta ba bzhin gyi don rab tu rnam par (P145b) dbye ba'i phyir sangs rgyas kyi
gsung mnyan pa la dad pa can rnams kyis shin tu rings par bya'o ||

[B] 今や牟尼の言葉を語る者もわずかと〔なり〕、銀と金を区別する者も
わずかとなった。このように教 (*āgama) と証 (*adhigama) に努める
ことに怠惰であるから、⁽²⁵⁾ ブッダというこの無垢なる太陽の終端が没
しようとしている。⁽²⁶⁾

[C] それゆえ、すべてが没してしまわぬうちに、如実なる諸の意味の分
析に努力がなされねばならない。牟尼の言葉という光が〔完全に〕
没したなら、世の人々はあまねく一円の黒闇に覆われることになる。

それゆえ、一円の黒闇が覆わぬうちに、如実なる意味を分析するために、信
あるものたちはブッダの教えを聴くことを急ぐべし。

(VyY 5.2.29, D shi 125a1-3, P si 145a6-b1)

「牟尼」という「太陽」はすでに沈みかけ、日没を迎えつつある。ただ、「牟
尼の言葉」という夕焼けの「光」がわずかに残されている。夕陽が沈み、「世
の人々 (*jagat)」が完全なる「黒闇」(法滅)に覆われる前に、そのわずかな東
の間である今、ブッダの教えの学びに努めよという。この「信あるたちは仏説
を聴くことに急なるべき」という点に、世親の危機意識が集約されているよう
に見受けられる。なお『釈軌論』では [A] (VyY 5.2.28) と [B] [C] (VyY

5.2.29) というように別の小節に別れるが、内容から判断して、引用元では恐らく一連の偈として並んでいた可能性があるように思われる。

《第3小節》

[D] | sbyangs pa'i yan lag rnam⁽²⁷⁾ 'gyur da ltar ni |
| dge slong tshogs kyang byams las phyir phyogs shing |
| sdom brtson skye bo dge 'dun nang dag tu |
| dogs med rtags mtshan can dang bya thogs rgyu |

[E] | sngon gyi bsam gtan sa ni gang yin pa |
| kye ma ji ltar 'bras kyi sa dag byed |
| 'dir ni thub pa'i bstan pa dus ring du |
| gnas par mi 'gyur bar ni dogs par 'gyur |

[D] 頭陀支は変質する。今や、比丘たちの集団でさえ慈しみに背を向け、律儀に努めるものたちはサンガの中でむなしく〔比丘の〕しるしをまとい、なすべきことを妨げる原因となっている。

[E] かつては静慮の地であったものを、ああ (*aho) どうして腫物 (*gaṇḍa) の地とするのか。この世では牟尼の教えが永くは存続しないのではないかとの疑惑がある。

(32)
(VyY 5.2.42, D shi 128b1-3, P si 149a5-7)

同時代の比丘たちに向けて、手厳しい嘆きの言葉 (kye ma, *aho) が放たれる⁽³³⁾。今や、比丘でさえサンガの中でむなしく比丘のしるしをまとうに過ぎない。「ブッダの教えが失われる」という事態は、教えの担い手の衰退という形で顕在化する。この点が、阿含經典さらには大乘經典に示される法滅観、すなわち「人」ではなく「教え(法)」の衰退に焦点が当てられる法滅周期説との大きな違いである。さらに、本節にて取り上げた上記の3例ではいずれも、「現在」(deng sang, 前2小節) または「今や」(da ltar ni, 第3小節) と、時代性を刻印

した表現が含まれる。こうした時代意識は、時代を越えて出家者たちに共有されていたであろう。

以上が『釈軌論』第5章の3つの小節である。そこでは、5つの偈の引用とそれに対する世親の解説によって法滅観が示されている。世親は何のクレジットもつけないが、果たしてこれらの偈の出典は一体どこにあるのか。最近知られるようになった、馬鳴に帰せられる『三啓集』を紐解くと、そこには馬鳴と世親をつなぐ重要な事実が見出されるのである。

3. 第29 三啓経に見出される同一偈

この3年ほどの間に本稿の共著者（松田）によってチベットのポカン（sPoskhang）僧院に伝えられた梵文『三啓集』写本の解読研究が複数発表されている。それによると、『三啓集』には馬鳴によって編纂されたという40種の三啓経が含まれる。それぞれの三啓経は三つの部分（*danḍa* 啓）より構成され、第1ダンダと第3ダンダに配された、主として既存の馬鳴作品から借用されたと思われる偈によって第2ダンダに置かれた阿含経典を挟み込むという体裁の読誦文献が三啓経である⁽³⁵⁾。

本稿で取り上げた『釈軌論』における引用偈との関係で問題となるのは、写本では29番目に書かれた三啓経である。その第29 三啓経の第2ダンダに置かれた阿含経典は『中阿含』第124 経の『八難経（**Aṣṭākṣaṇa*）』であるが⁽³⁶⁾、同経は『釈軌論』第5章第3節にも言及され、その箇所に対する徳慧の『釈軌論注（*Vyākhyāyukti-tīkā*）』では経典の散文部分のほぼ全文が引用される点で、世親との繋がりが見出される経典でもある。第29 三啓経の第2ダンダに用いられた『八難経』のみは本稿の共著者（上野）によって『三啓集』写本に基づく梵文テキストと翻訳がすでに出版されているが⁽³⁷⁾、上野の出版には含まれない第29 三啓経の第3ダンダには、ブッダの教えを讀える定型偈を含めて全部で23偈が置かれている。定型偈以外はいずれも馬鳴のいずれかの作品から借用された偈であるとみなして特に問題はないが、その中の第20偈から第22偈に至る3偈を紹介すると以下の通りである（Ms. 79r2-3）。

śvalpo 'pi samprati muner vacanasya vaktā

karttā ca pāṃśukaṇikālpakatām upetaḥ |

ity āgamādhigamayor abhiyogamādyān

majjaty ayaṃ vimalabauddhakṛtāntasūryaḥ || 20 ||⁽³⁸⁾

今や牟尼の言葉 (vacana) を語る者 (vaktṛ) もごくわずかとなり、また〔牟尼の言葉を〕分別する者 (kartṛ)⁽³⁹⁾ も泥片 (pāṃśu) や穀片 (kaṇika) [の如く] わずかとなった。このように教 (āgama) と証 (adhigama) に対する努力 (abhiyoga) に怠惰 (māndya)⁽⁴¹⁾ であるから、無垢にしてブッダの教義 (bauddhakṛtānta) というその太陽は没しようとしている。⁽⁴²⁾

tad yāvad astamayam eti na sarvaṃ eva

tāvad yathārthavicaye kriyatām prayatnaḥ |

astaṅgataś ca hi muner vacanāvabhāsa

ekāndhakāragahanañ ca jagat samantāt || 21 ||⁽⁴³⁾

だから、〔ブッダの教義という太陽が〕すべてが没しないうちに、正しい意味の確認に努力 (prayatna) がなされねばならぬ。なぜなら、牟尼の言葉という光 (vacanāvabhāsa) が〔完全に〕没したなら、あまねく世間は一つの闇 (ekāndhakāra) の深み (gahana) にあることになるのだから。

iti kaṇṭhagataprāṇaṃ viditvā śāsanaṃ muneh |

balakālaṃ malānāṃ ca na pramādyāṃ mumukṣubhiḥ || 22 ||⁽⁴⁴⁾

このように牟尼の教え (śāsana) は息が喉にある (死に瀕している) と知って、また垢 (mala) が力を増す時代であると〔知って〕、解脱を願う者たちは放逸になるな。

驚くべきことに、第3ダンダに連続して現れるこれら3偈 (第20-22偈) のなかで、一部の語にヴァリエントが認められるものの、第20偈と21偈は本稿で先に提示した『釈軌論』第5章で法滅を説く [B] [C] の偈に他ならない。さらに、次の第22偈は『俱舍論』の結びの偈 (AK 8.43) と全く同じである。この

偈は、後の時代に『俱舍論』に付されたと推定される「破我品」を除き、第1章「界品」から第8章「定品」に至る、『俱舍論』の全体を締め括る最終偈である。[B] [C] が第29三啓経に含まれ、なおかつ『釈軌論』にも同じ順序で提示される点から、内容的に見ると、[A] も含めて、これら一連の偈は世親に先行する馬鳴の作である可能性が高い⁽⁴⁵⁾。第29三啓経の編者が馬鳴自身であったとしても、後代の人物であったとしても、少なくとも編者がこれら3偈を一連のものとして捉えていたことは間違いないであろう。共著者（松田）によってすでに示されているように、それぞれの三啓経に置かれた偈は、例外はあるものの、いずれも馬鳴の作品から借用された偈とみなしてよい。しかし、これらの偈の出典は馬鳴の『ブツダチャリタ』でも『サウンドラナンダ』でもない。可能性として残るのは、カーヴィヤ調の韻文によって綴られた阿含經典解釈論と推定されている『莊嚴経論 (Sūtrālamkāra)』だけである。同論は馬鳴による著作活動の起点となった巨大作品であったと思われるが、失われて現存しない。

このように、第29三啓経に置かれた [B] [C] と同一の2偈（第20-21偈）が馬鳴の偈、特に『莊嚴経論』の偈であった蓋然性は高い。さらに、それに続く第23偈が『俱舍論』最後の偈と同一であるということは、その偈さえも世親のオリジナルではなく、世親自身が『俱舍論』の最終偈に『莊嚴経論』の偈を借用した可能性すら考慮すべきであろう⁽⁴⁶⁾。ただ、現時点ではそう断言できる他の証拠もなく、推定にとどめざるをえないが、『俱舍論』の最終偈（AK 8.43）をめぐっては、諸文献の位置づけが錯綜していることも参考として指摘しておきたい⁽⁴⁷⁾。

4. 俱舍論の結びにおける法滅観とその由来

さらに、第29三啓経第3ダンダの上述3偈および『釈軌論』の [A] [B] [C] を念頭に置いた上で、『俱舍論』の結びを飾る5偈（AK 8.39-43）を見た場合、第29三啓経と『釈軌論』の偈のあらゆる要素が『俱舍論』の結びの偈に含まれていることに気づく。まずは『俱舍論』結語の最初の偈、あまりにも有名な「正法」の定義である。

saddharmo dvividhaḥ śāstur āgamādhigamātmakaḥ |

dhātāras tasya vaktāraḥ pratipattāra eva ca || AK 8.39

師（ブツダ）の正法は、教（āgama）を本質とするものと、証（adhigama）を本質とするものとの二種である。それ（正法）の保持者は〔教を〕語る者（vaktṛ）たちと〔証を〕実修する者（pratipattṛ）たちに他ならない。

教（āgama）と証（adhigama）という正法の二分法、そして正法の保持者（dhātṛ）とは教を語る者（vaktṛ）と証を修する者（pratipattṛ）であるとの、『発智論（*Jhānaprasthāna*）』などに由来する定義は、⁽⁴⁸⁾すべて第29 三啓経第3 ダンダ第20 偈に含まれる。馬鳴の偈では牟尼の言葉を「語る者（vaktṛ）」と「分別する者（⁽⁴⁹⁾karṭṛ）」という2種の行為者が言及される。後者の「分別する（√kṛt）」とは、第21 偈にある「正しい意味の確認」（yathārthavicaya）を意味する。牟尼の言葉を聞くのみならず、その言葉の意味を確認した上で実践する者⁽⁵⁰⁾を含意しよう。その行為対象である「牟尼の言葉」が、教と証を本質とするものである。さらには、法滅への危機意識という文脈も『俱舎論』の結語に共通する。

この「教と証」の偈に続いて、『俱舎論』の結びでは、カシュミールの毘婆沙師への言及を含む AK 8.40 を挟み、⁽⁵¹⁾法滅に対する危機意識が次のような3 偈⁽⁵²⁾で表明される。

nimilite śāstari lokacakṣuṣi kṣayaṃ gate sāksijane ca bhūyasā |

adr̥ṣṭatattvair niravagrahaiḥ kṛtāṃ kutārkikaiḥ śāsanam etad ākulam || AK 8.41

(1) 師（ブツダ）という世間の眼はずでに閉じられ、(2) 〔ブツダの教えの〕証人たち（仏弟子たち）もおおかた（bhūyasā）去って行き、(3) 真実を見ず抑制なく悪しき思弁の者たちによって (4) この〔ブツダの〕教えは乱れている。⁽⁵³⁾

gate hi śāntiṃ paramāṃ svayāmbhuvi svayāmbhuvāḥ śāsanadhurdhareṣu ca |

jaḡaty anāthe guṇaḡhātibhir malair nirāṅkuṣaiḥ svairam ihāḡya caryate || AK 8.42

(1') 自在者（ブツダ）も、(2') 自在者の教えを保持する人々（ブツダの弟

子)も最高の寂靜(涅槃)へと去って行き、保護者なき世間では(3')功徳を破壊する、拘束具もないもろもろの垢(煩惱)が(4')ここでは今や思いのままにふるまっている。

iti kaṅṭhagataprāṇaṃ viditvā śāsaṇaṃ muneh |

balakālaṃ malānāṃ ca na pramādyāṃ mumukṣubhiḥ || AK 8.43

このように牟尼の教えは息が喉にある(死に瀕している)と知って、また垢が力を増す時代であると[知って]、解脱を願う者たちは放逸になるな。

以上のように第41偈では、(1)ブツダはすでに涅槃に入り、(2)ブツダの弟子たちもほとんど死に絶え、(3)真実を見ることなく、自己抑制なく、悪しき思弁に陥るこの出家者たちによって(4)ブツダの教えは乱れている、との法滅観が表明される⁽⁵⁴⁾。この4項は次の第42偈でも言葉を変えてパラフレーズされる。「出家者の衰退」が法滅の原因と見定められている点も『釈軌論』の偈、すなわち第29三啓経第3ダダの偈と共通する。偈の(2)(3)(4)の表現も、さらには(2)に確認される「概して、おおかた(phal cher / bhūyasā)」という語も、先の『釈軌論』(VyY 5.2.28)に引用された[A]と共通する。世親はこの『俱舍論』の偈を作るにあたり、馬鳴作と思われる偈[A]を前提にした可能性もあるのではないか。両者を表にまとめると以下になるよう。

VyYに引用される [A]	AK 8.41
yongs su 'dzin par byed pa phal cher 'das pa dang 〔ブツダの教えを〕保持する者は概して (phal cher) 過ぎ去り	kṣayaṃ gate sāksijane ca bhūyasā 〔ブツダの教えの〕証人たちもおおかた (bhūyasā) 去って行き
nyes par rnam par bshad pa dag gis mthu bcom pas 〔ブツダの教えを〕間違っ解説する者たちによって力が破壊されたことにより	adrṣṭatattvair niravagrahaiḥ kṛtāṃ kutārkikaiḥ 真実を見ず抑制なく悪しき思弁の者たちによって
deng sang legs par bshad pa mthar gyur to 現在、〔ブツダの〕善説は死に瀕している	śāsaṇam etad ākulam この〔ブツダの〕教えは乱れている

この表で示した [A] に加えて [B] [C] が『釈軌論』に現れ, [B] [C] と同一偈が第 29 三啓経第 3 ダンダに含まれ, さらに [B] [C] と一連のものとして『俱舎論』結語の最後の偈が同第 3 ダンダに配置されている。そして AK 8.43 に先行する AK 8.41-42 が [A] とほぼ同一の構文を持ち, 語彙すら共有するという事実は, 「世親は馬鳴の恐らくは『莊嚴経論』の偈(詩)を前提として『俱舎論』の結偈を作った」と推定するに充分である。以下, 三文献の対応関係について簡潔に図示しておこう。

第 29 三啓経第 3 ダンダ	釈軌論第 5 章	俱舎論結びの偈
	A	AK 8.41, 42
第 20 偈	= B	AK 8.39
第 21 偈	= C	
第 22 偈		= AK8.43

共著者(上野)が別稿で明らかにしているが, 『俱舎論』の次に著されたとみなされる『釈軌論』の終結部では, 『莊嚴経論 (Sūtrāṅkārā)』という名前を挙げて, 2つの長い偈が引用される。その2偈は『釈軌論』の全体を要約するかの如き内容を有している。『俱舎頌』の結び (AK 8.40) に, 自身の所説が「カシュミールの毘婆沙師説 (Kaśmīra-vaibhāṣika-nīti)」に「ほほ (prāyas)」に基づいていることを明示するのと同様, 世親は『釈軌論』における自身の所説が『莊嚴経論』に由来する經典解釈を参考にしたと暗示しているのである。このことを考えあわせるなら, 『俱舎論』の最終偈 (AK 8.43) が馬鳴作品から着想を得てそのまま借用した可能性も考慮せざるをえない。さらに想像を逞しくするなら, 『俱舎論』の結偈が, 馬鳴へのいわば「オマージュ」でもあった可能性があるかもしれない。現段階では推測の域を出ないが, この推測は今後, 經典解釈の, あるいはアビダルマ教義学の先駆者としての馬鳴像が明らかになるにつれ, より明らかになるかもしれない。世親は馬鳴と同じくアヨーディヤーを活動の拠点としたとも伝えられる。当時の出家者たちは『釈軌論』と『俱舎論』の結語を耳にしてすぐにそれが馬鳴作であることに気づいたであろう。別の観点に立

てば、それらの結語は対外的に馬鳴への傾倒を明示しているとも見ることができよう。いずれにせよ今後の研究は、世親の背景に馬鳴の存在があることを想定すべきであろう。

5. 釈軌論第5章第3節に見られる馬鳴の偈

さらに、法滅観とは異なるが『釈軌論』第5章第3節「厭離⁽⁵⁷⁾の話」に引用される偈のうち、『三啓集』に含まれる同一偈2例を紹介する。

《第1例》

| (1) shes dka' (2) bzlog dka' (3) dpung thub dka' ba can (4) rgyu ba |
| rtogs dka' (5) 'dod chags rang dga'i dbang po can rnams kyi |
| bzang po'i lam rnams 'joms dang (6) rdul ni bsags rnams kyi |
| mos dang blo yi dgra yin (7) yid 'khrul rnams kyi ni |
| tshul khirms zad byed yin zhing 'byung po rnams kyi rdzas |
| lta bu'i dge ba 'joms pa mi dge'i yul rnams yin |

(1) 知り難く、(2) 覆し難く、(3) 征服し難い軍勢を持ち、(4) 動きを推測し難く、(5) 貪りをほしいままにする感官を有する者たちにとっては賢者たちの道を攻撃するものであり、(6) 塵が積もった者たちにとっては信解(mos)と慧の敵であり、(7) 意が迷乱した者たちにとっては戒を潰滅させるものであり、生き物たちにとっては富の如き善を壊すものである、諸の不善なる対境は。
(VyY 5.3.3.1, D shi 131b3-4, P si 152b7-8)

これと同じ偈が第26三啓経(毒蛇喻经)第3ダンダに見られる(Ms. 69r4-5)⁽⁵⁹⁾。

(1) durjñeyā (2) durvvinēyā (3) duravajayabalā (4) durgādhagatayo
(5) bhettārah satpathānām (6) dhṛtimatiripavo (7) vṛttakṣayakarāḥ |
rāgoddāmendriyāṇām avihatatamasā(69r5)m udhhrāntamanasām
bhūtānām dravyabhūtaṃ kuśalam akuśalā muṣṇanti viṣayāḥ ||⁽⁶⁰⁾

(1) 知り難く、(2) 調伏し難く、(3) 征服し難い軍勢を持ち、(4) 渡り難

い行程 (gati) を持ち、(5) 正しい道の分断者であり、(6) 堅固さ (dhr̥ti) と慧 (mati) の敵であり、(7) 戒 (vr̥tta) の破壊者である不善なる対境 (viṣaya) は、貪 (rāga) に満ちた (uddāma) 根 (indriya) を持ち、迷妄 (tamas) を断じておらず、迷乱の意 (manas) もてる有情 (bhūta) たちの財産の如き善を奪う。

これは『毒蛇経 (Āśīviṣa)』の本文を解説する偈のひとつであり、「不善なる対境 (akuṣalā viṣayāḥ)」がもたらす弊害が全7項にまとめられる。世親はその語句の一事について事細かに注釈を施している (本稿では割愛)。(6) mos dang blo yi dgra yin と (6) dhr̥timatiripavaḥ, あるいは c 句の rdul ni bsags rnams kyi と avihatatamasām (チベット訳から推測する限り、VyY の原本には *upacitarajasām とあったか) との間(6)にわずかなヴァリエントがあるが、『釈軌論』と『三啓集』の偈は同一の出典、恐らくは馬鳴の『莊嚴経論』に基づくのであろう。第26三啓経の第3ダンダでは、この偈に続いて、王法に対する罪を犯すことを盗賊に喩え、自分に対する罪を犯すことを不善の対境 (viṣaya) に喩える偈が現れる(62)。その偈は『釈軌論』に引用はされないものの、先の偈に対する第2の解釈として、世親は「盗賊 (caura)」に言及する (VyY 5.3.3.3.2)。そこでは「不善なる対境」のもたらす弊害 (全7項) は「盗賊と性質が共通する」として、詳細な注釈が与えられる。その一部は以下の通りである。

nam grangs gzhan yang 'dod pa rnams ni chom rkun dang chos mthun par yongs su
 bstan pa yin no || chom rkun gyi rgyu bdun dag gis rkun po'i bya ba mthar phyin pa
 yin te | (1') mi 'phrigs pa'i rang bzhin yin | (2') 'phrigs na yang mi ldog pas brtan pa
 yin | (3') 'gro ba dang 'ong ba dang pha rol mnan pa dag la ngal ba med pas stobs
 dang ldan pa yin || (4') mi mngon pa dang bgrod dka' ba'i gnas su thag ring zhing
 thibs por rgyu ba yin | (5') ma lus par 'phrog pas snying brtse ba med pa yin | (6')
 gnyid log cing ra ro ba na 'joms pas dus shes pa yin | (7') mi mthun zhing sha khon
 can yin no || dngos po'i 'dod pa nyon mongs pa'i 'dod pa dang bcas pa rnams kyang
 de dang chos mthun pa yin te |

さらに別の解釈では、諸の欲望 [の対象] は盗賊と性質が共通することが示

された。盗賊の7つの諸原因によって、賊の振る舞いは完成する。〔7つの諸原因はどれか。〕(1') 動揺しないという本性があり、(2') 動揺しても退かない点で堅固であり、(3') 進んだり戻ったり他者を圧することに疲労しない点で力があり、(4') わかりにくく、行きにくい場所に、遠く離れ、隠れて動き回り、(5') 〔ひとつ〕残らず強奪する点で〔被害者に対する〕憐れみをもたず、(6') 〔相手が〕居眠りしたり、酒に酔っているときに攻撃する点で〔強奪の〕好機を熟知しており、(7') 〔世間(人倫)に〕敵対し敵意もっている。煩惱欲(*kleśakāma)と〔共なる〕諸の事物欲(*vastukāma)も、そうした〔盗賊〕と性質が共通する。(VyY 5.3.3.3.2, D si 132a4-6, P si 153b1-4)

この注釈は、盗賊(caura)と対境(viṣaya)を同質とするが、ここで紹介した偈に続く第3ダンダの偈を前提としているように見える。世親のいう「煩惱欲(*kleśakāma)と〔共なる〕諸の事物欲(*vastukāma)」こそが、第3ダンダの偈のテーマである「不善なる対境(akuśalā viṣayāh)」に他ならないからである。世親はその偈を引用こそしないものの、それを前提とした第2解釈(「不善なる対境は盗賊と性質が共通する」)を展開する点で、VyY 5.3.3.3.2に示される盗賊との共通性は、第3ダンダの偈における盗賊の譬喩に基づくと言える。

《第2例》

| nang par mar me rlung gis bskyod pa 'dra bar dang |⁽⁷⁰⁾

| chu bo'i 'gram gyi ljon shing rtsa ba 'gul 'dra bar |⁽⁷¹⁾

| snod chag yod pa'i chu ni 'dzag par byed pa ltar |⁽⁷²⁾

| 'gro ba 'di ni dbang med 'jig pa'i chos can yin |

夜明けの灯火が風に吹かれるように、水辺にある樹の根が揺れるように、壊れた器の中にある水が漏れるように、この世は力なく消滅する性質を有している。
(VyY 5.3.3.4, D shi 132b2-3, P si 153b7-8)

この偈は第38三啓経(『年少経*Dahra』雑阿含1226)の第1ダンダに以下のような同一偈の存在が確認される(Ms. 106r1)⁽⁷³⁾。

pavanacala iva prabhātadīpas tarur iva lolaśipho nadītaṣṭhaḥ |

jagad idam avaśaṃ pranāśadharmi sraavad iva jarjarabhājanastham ambhaḥ ||

風で揺れる夜明けの灯火の如く、川の斜面にあって不安定な根をした樹木の如く、壊れた器にあって漏れ出る水の如く、力なきこの世間は滅亡の性質を持つ。⁽⁷⁴⁾

この譬喩は、文字どおり「風前の灯」という意味でも、あるいは夜間に求められる灯が陽の昇る翌朝には風に吹き消されているという意味でも解釈することができよう。この偈に対しては、世親自身が総括偈を作成までして仔細に注釈を施している。⁽⁷⁵⁾

この2例を比較すると、『釈軌論』のチベット文と『三啓集』から回収される梵文原典との間には、伝承上のわずかな差異も見られるが、同時に『釈軌論』のチベット訳が信頼に足るものである点も確認できたように思われる。『釈軌論』第5章には約60例の出典不詳の偈が提示されるが、本稿で紹介した偈以外にもアシュヴァゴーシャ作品の偈が埋もれている可能性は高い。アシュヴァゴーシャからヴァスバンドゥへと確かに流れる伝承の一端がここにも垣間見られたのである。

略号と文献

AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): See AKBh.

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Patna: Jayaswal Research Institute, 1967.

D Derge Xylograph (Tokyo University) of the Tibetan bstan 'gyur.

P Peking Xylograph (Otani University) of the Tibetan bstan 'gyur.

T 大正新脩大藏經.

TDM Sanskrit Manuscript of the *Tridaṇḍamālā*.

VyY *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu): D 4061, P 5562.

VyY† *Vyākhyāyuktiṭīkā* (Guṇamati): D 4069, P 5570.

Horiuchi Toshio

2022 "Aśvagoṣa, Asaṅga, and Vasubandhu: from the *Vyākhyāyukti* Chapter 5." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 70-3: Forthcoming.

Matsuda Kazunobu

- 2020 "A Sanskrit manuscript of Vasubandhu's *Abhidharmakośabhāṣya* from Tibet: An abbreviated version with a short commentary." *Sanskrit manuscripts in China III*. Beijing: China Tibetology Publishing House, 205-214.

青原 令知

- 2018 「入滅、分裂、結集、アビダルマー *Saṅgīti-sūtra* の成立背景」『仏教学研究』74: 7-35.

赤沼 智善

- 1939 『佛教教理之研究』, 名古屋: 破塵閣書房.

上野 牧生

- 2015 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』8: 203-234.
2020 「第29 三啓經(八難經)の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: 21-46.

上野 牧生・堀内 俊郎

- 2018a 「世親作『釈軌論』第5章翻訳研究(1)」『国際哲学研究』7: 117-138.
2018b 「同上(2)」『仏教学セミナー』107: 31-70.
2018c 「同上(3)」『インド学チベット学研究』22: 153-178.
2019 「同上(4)」『南アジア古典学』14: 147-176.

小谷 信千代

- 2010 「解釈学の進展」『新アジア仏教史 03 インドⅢ 仏典からみた仏教世界』, 東京: 佼成出版社, 217-264.

加藤 純章

- 1978 「俱舎論頌ノート」『印度学仏教学研究』26-2: 601-606.

櫻部 建

- 1981 『佛典講座 俱舎論』, 東京: 大蔵出版.

櫻部 建・小谷 信千代・本庄 良文

- 2004 『俱舎論の原典研究 智品・定品』, 東京: 大蔵出版.

田中 裕成

- 2019 「俱舎論における非伝説句の立場—綵縁法念住の内容を巡って—」『印度学仏教学研究』68-1: (110)-(114).
2021 「新出梵文俱舎頌 (IV.3, V.27) と諸俱舎頌の関係」『対法雑誌』2: 31-61.

船山 徹

- 2021 『婆藪槃豆伝: インド仏教思想家ヴァスバンドウの伝記』, 京都: 法蔵館.

堀内 俊郎・上野 牧生

- 2022 「世親作『釈軌論』第5章翻訳研究(5)」『真宗総合研究所研究紀要』39. (2022.3月刊)

本庄 良文

- 2014a 『俱舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上巻, 東京: 大蔵出版.
2014b 『同上』下巻, 東京: 大蔵出版.

松田 和信

- 2019 「三啓集 (*Tridandamālā*) における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.
- 2020a 「ブッダチャリタ第16章に見られるアートマン批判—三啓集写本による梵文テキストと和訳—」『インド論理学研究』12. (未刊)
- 2020b 「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」—梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.
- 2020c 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—如来十号論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61).
- 2021a 「不浄観を説く中阿含139経—三啓集から回収された梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.
- 2021b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—戒論に埋め込まれた莊嚴経論—」『印度学仏教学研究』70-1:(61)-(69).
- 2022 「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー—鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品—」『佛教大学仏教学部論集』106. (2022.3月刊)
- 松田 和信・出本 充代・上野 牧生・田中 裕成・吹田 隆道
2022 「毒蛇の喩え—第26三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』27. (2022.3月刊)
- 渡辺 章悟
2011 「大乘仏典における法滅と授記の役割—般若経を中心として—」『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教の誕生』, 東京: 春秋社, 73-108.

* 本稿で取り上げた『釈軌論』と馬鳴作品の読解にあたっては、佛教大学の本庄良文教授および非常勤講師の田中裕成氏、独マールブルク大学の出本充代博士、中国浙江大学の堀内俊郎副教授より御教示を得た。御礼申し上げる。

- (1) 法滅に関する阿含經典の記述については赤沼 1939: 541f. を、大乘仏典の記述については渡辺 2011: 78f. を参照。法滅に関する先行研究も渡辺 2011 に詳しい。
- (2) 馬鳴の『莊嚴経論』については上野 2015, 松田 2020c, 2021b, 2022 参照。
- (3) 『釈軌論』の末尾には、同論全体を要約するが如き『莊嚴経論』の偈が引用される。堀内・上野 2022 を参照。その内容分析については Horiuchi 2022 を参照。
- (4) 共著者(上野)による『釈軌論』の翻訳研究については、上野・堀内 2018a, 2018b, 2018c, 2019, および堀内・上野 2022 を参照。翻訳にあたっては本庄良文教授と堀内俊郎副教授より多くの御教示を得たことは明記しておきたい。本稿に用いた『釈軌論』の翻訳研究は既発表稿から抜萃した。ただし、一部の訳語については共著者(松田)によって変更された部分もあることを付記しておきたい。
- (5) 「目的を明示すること」(dgos pa yang dag par bstan pa nyid) と題される第2節では、出家・在家を問わず仏教者が仏の教えを聴聞すべき「目的」が語られる45(短い総括を別立てすれば46)の小節から成る。その翻訳は上野・堀内 2018a: 124 から 2018b, 2018c, 2019: 166 にまたがる。

- (6) nyes par VyY(DP) VyYT̄(P) : nyc bar VyYT̄(D)
- (7) gis VyY(D) VyYT̄(D) : gi VyY(P) VyYT̄(P)
- (8) pas VyY(D) : zhing VyYT̄(DP)
- (9) thug VyY(D) VyYT̄(D) : thub VyY(P) VyYT̄(P)
- (10) du VyY(D) : om. VyY(P)
- (11) par VyY(D) : pa VyY(P)
- (12) pa VyY(D) : la VyY(P)
- (13) gis VyY(D) : gi VyY(P)
- (14) na VyYT̄(DP) : nas VyY(DP)
- (15) rtogs VyY(D) VyYT̄(DP) : rtog VyY(P)
- (16) gzung VyY(D) : bzung VyY(P)
- (17) dang VyY(D) : om. VyY(P)
- (18) kyis VyY(D) : kyi VyY(P)
- (19) gyur VyY(D) : 'gyur VyY(P)
- (20) gyis VyY(D) : gyi VyY(P)
- (21) pu'i VyY(D) : po'i VyY(P)
- (22) kyi VyY(D) : kyis VyY(P)
- (23) rings VyY(P) : rigs VyY(D)
- (24) VyY と TDM との間にある b 句の相違については本稿の注 (40) を参照。
- (25) VyY と TDM との間にある c 句の相違については本稿の注 (41) を参照。
- (26) VyY と TDM との間にある d 句の相違については本稿の注 (42) を参照。
- (27) las VyY(DP) : pas VyYT̄(DP)
- (28) sdom VyY(DP) VyYT̄(P) : sngom VyYT̄(D)
- (29) rtags VyY(D) : rtag VyY(P) : stag VyYT̄(DP)
- (30) kyi VyY(DP) VyYT̄(P) : bu'i VyYT̄(D)
- (31) 'dir VyY(D) : 'di VyY(P)
- (32) VyY 5.2.42 の世親の注釈については上野・堀内 2019: 161f. を参照。
- (33) 『釈軌論』第 5 章の後出箇所 (VyY 5.3.3.6.2) で世親は kye ma, *aho の語義解釈を列挙し、その語義に「嘆き」(mya ngan byed pa) の意味があることを明言する。堀内・上野 2022 を参照。
- (34) 渡辺 2011 を参照。
- (35) 三啓経の詳細は松田 2019, 2021b, 2022 等を参照。
- (36) 『三啓集』所収の阿含経典の中に『中阿含経』の 2 経典が見出されている。『中阿含経』139「息止道経」と 124「八難経」である。松田 2021a 参照。
- (37) 『八難経』のテキストと和訳は上野 2020 を参照。第 1・第 3 ダンダの馬鳴詩については別稿を期す。なお本稿はその第 3 ダンダ末尾の 3 偈を対象とした研究でもある。
- (38) 韻律は次の TDM 29.3.21 と同様に Vasantatilakā.
- (39) あるいは「[牟尼の言葉を] 実践する者 (kartṛ)」とも読みうる。

- (40) b 句については、『釈軌論』に提示される偈はこの部分の原文が異なっていたのであろう。

VyY: dngul dang gser du 'byed par 'gyur ba'ang nyung bar gyur ||

TDM: karttā ca pāmśukāṇikāpakatām upetaḥ |

堀内俊郎副教授の御教示によれば、TDM を介して VyY dngul dang gser du の原語を想定するなら、例えば *rūpyakanaka- という原語想定が可能である。VyY dngul dang gser du もチベット訳として整合性が取れている訳文ではあるも、その譬喩の類例が見出せない点が難点として残る。VyY 'byed par 'gyur ba の原語を TDM karttr と見ることやや難点あるかもしれない。さらに、出本充代博士の御教示によれば、-pāmśukāṇikā は「埃の粒子」を意味するはず。かえって『釈軌論』チベット訳に誤った訂正が施されたのではないか。翻訳者が kaṇikā を kanaka と読み違えて「金」と訳したために、「埃と金のように少なくなった」という文意不明の訳文となり、校訂者が文意の通る訳文に書き換えた可能性も想定すべきではないか。'byed pa (√bhid) と byed pa (√kr), dngul (銀) と rdul (埃) という文字の類似性も偶然ではないように思われる。

- (41) VyY: 'bad zhan pas

TDM: abhiyogamādyān

- (42) VyY: sangs rgyas nyi ma mthar phyin dri ma med

TDM: vimalabauddhakṛtāntasūryaḥ

VyY の mthar phyin が TDM の kṛtānta に対応するかどうか、判断が難しい。

- (43) 韻律は前の TDM 29.3.20 と同様に Vasantatilakā.

- (44) 韻律はこの TDM 29.3.22 のみ Anuṣṭubh.

- (45) 『釈軌論』において世親自作の偈が提示される場合、世親自身、あるいは注釈者である徳慧により、その偈が総括偈 (*saṃgrahaśloka) であると明示される。総括偈はチベット訳にして 1 詩脚 7 音節の śloka 調である。したがって『釈軌論』の形式から、[A] [B] [C] を世親の自作とみなすことはできない。

- (46) 仮に第 29 三啓経の編者が馬鳴ではなく、世親より後代の人物であったとしても、編者は 3 偈を一連の偈として配列したわけであるから、第 22 偈は「俱舎論の結語」という文脈を離れ、法滅観を内容とする独立した偈として解釈されていたことになろう。

- (47) 『俱舎論』の諸ヴァージョンおよび諸注釈文献における結語としての偈 (AK 8.39-43) の位置づけは錯綜している。ここでは、世親自らの散文注 (bhāṣya) が付されない『俱舎頌』8.41-43 の 3 偈を便宜的に結偈と呼ぶ。3 偈のテキストと和訳については AKBh 460.4-13 と櫻部・小谷・本庄 2004: 359 を参照。田中裕成氏の研究成果 (田中 2019, 2021) および直接の教示によると、『俱舎頌』のポタラ宮写本 (AK Potala Skt. Ms.) および衆賢による俱舎論釈ともみなされる『順正理論』、さらに同じ衆賢の『顕宗論』には同じ結偈は存在しない (『顕宗論』には独自の結びの韻文がある)。これらの文献は AK 8.40 によって『俱舎頌』の全体を結ぶ。これらの文献には「破我品」は付属しない。一方、ゴル寺写本の『俱舎頌』(Gokhale

ed.) と Bhāṣya (Pradhan ed.), さらにチベット語訳の『俱舎頌』とチベット語訳の Bhāṣya, 玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』には結偈が存在する。これらの文献には「破我品」が付属する。「破我品」が付属しない安慧の注釈(梵文写本と Tib.), あるいは「破我品」が付属する称友 (Skt. と Tib.), 満増 (Tib.), 陳那 (Tib.) の諸注釈では第 8 章「定品」末尾で結偈を引いて注釈する。真諦訳『阿毘達磨俱舍釋論』では結偈が「破我品」の冒頭に置かれ、「破我品」における論述の出発点として結偈が位置づけられている。称友, 満増, およびチベット撰述の注釈文献類もその位置づけを踏襲する。漢訳の伝承については加藤 1978, 櫻部 1981: 380f. も参照。ひとつの見方を示すなら, AK 8.39-40 は『俱舎論』の結び, そして 8.41-43 は散文注 (bhāṣya) を含む『俱舎論』全体の結び (ゆえに世親の自注なし) と推測できる。このように, 結偈の有無とその位置づけは錯綜するものの, 『俱舎論』およびその関連文献だけを眺める限り, 結偈の世親作を疑うまでには至らない。ただ, もし偈の背後に馬鳴の存在があったとすれば, 結偈をめぐる錯綜も馬鳴を前提に考え直す必要があるのではないか。

- (48) 『発智論』(T. No. 1544, T26, 1018c8-19), 『大毘婆沙論』(T. No. 1545, T27, 917c9-24), 『雜阿毘曇心論』(T. No. 1552, T28, 957c1-4) 他多数。
- (49) あるいは「[牟尼の言葉を] 実践する者 (kartṛ)」か。
- (50) それはそのまま, VyY 5.2.28 「これ (仏説) を聞き, 保持し, 内容のとおり実践することに, 信あるものたちは努めるべきである」に引き継がれる。
- (51) AK 8.39 に引き続き, 8.40 では, 世親自身のこれまでの所説が「ほぼ (prāyas) カシュミールの毘婆沙師のそれに基づくこと, そして牟尼たちだけが「正法の方軌に対する基準 (pramāṇa)」であると表明される。詳細は田中 2019 を参照。AK 8.40 の韻律は Indravajrā である。この 8.40 のみは後述の馬鳴とは特に関係はないであろう。
- (52) 『俱舎論』の結偈については AKBh 460.4-13, 櫻部・小谷・本庄 2004: 359 を参照。
- (53) 韻律は AK 8.41-42 が Vamśastha であり, 43 のみ Anuṣṭubh である。TDM 29.3.22 と平行する AK 8.43 のみ韻律が異なる。
- (54) 法滅への危機意識がアビダルマ教義学の構築に動機を与えた可能性がある点については青原 2018 を参照。青原はアビダルマ的性格を有する阿含經典 *Saṅgītisūtra* の分析を通して, アビダルマという営為の動機に迫ろうとする。『俱舎論』の結びが法滅に対する危機意識の表明である点もそれと無関係ではあるまい。
- (55) この点は世親(『俱舎論』と『釈軌論』)だけでなく, サンガバドラ (Saṅghabhadra, 衆賢) も共有していたようである。衆賢の法滅観については小谷 2010: 250-253 を参照。その背景にある阿含經典については本庄 2014b: 877 参照。
- (56) 本稿の注 (51) 参照。
- (57) 『釈軌論』第 5 章第 3 節「厭離の話」(skyo ba'i gdam, *saṃvega-kathā) 全体の和訳は堀内・上野 2022 を参照。
- (58) mos VyY(P) : chos VyY(D)
- (59) 第 26 三啓経(毒蛇経)の全文が本稿と同時に出版される予定である(松田・出本・上野他 2022)。

- (60) 韻律は *Suvadana*。
- (61) 堀内俊郎副教授の御教示に基づく。
- (62) その偈については松田・出本・上野他 2022 に梵文テキストと翻訳が掲載されているので参照していただきたい。
- (63) *brtan pa VyYṬ(DP) : bstan pa VyY(D) : bstan VyY(P)*
- (64) *mnan VyY(D) : gnon VyY(P)*
- (65) *yin | VyY(P) : yin no || VyY(D)*
- (66) *mngon VyY(DP) VyYṬ(D) : ngon VyYṬ(P)*
- (67) *ba'i VyY(D) VyYṬ(DP) : ba'i ba'i VyY(P)*
- (68) *'phrog VyY(D) : 'phrogs VyY(P)*
- (69) *po'i VyY(D) : pa'i VyY(P)*
- (70) *bar VyYṬ(DP) : ba VyY(DP)*
- (71) *bar VyYṬ(DP) : dang VyY(DP)*
- (72) *'dzag VyY(DP) VyYṬ(D) : 'zag VyYṬ(P)*
- (73) この偈は松田 2022 でも紹介されている。
- (74) 韻律は *Puṣpitāgrā*。
- (75) *VyY 5.3.3.4* の詳細は堀内・上野 2022 参照。

(本研究は JSPS 科研費 17K02224, 17H02272 の助成を受けたものである)

佛教學七三十一

第 113 号

論 文

『四分律行事鈔』の構成とその意図
——森羅万象を類聚する営みとして——……………戸次 顕彰… 1

最終講義

ツォンカバ思想の形成過程……………福田 洋一…33

* * * * *

学会彙報……………54

* * * * *

論 文

アシュヴァゴーシャからヴァスバンドウへ……………上野 牧生…51
——釈軌論と俱舍論に見る法滅観と馬鳴の詩作品——
松田 和信

タルマリンチェン注による『プラマーナ・サムッチャヤ』
第5章の構造解釈……………秦野 貴生…30

A Translation of the Story of an Angry Monk
Who Became a Poisonous Snake in the *Muktaka*
of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*
—— Part One: Two Clichés ——……………Ryohji Kishino… 1

2021年6月

大谷大學佛教學會

BUDDHIST SEMINAR

CONTENTS

Article

- The Structure of the *Shifenlu xingshichao* and Its Intention:
As an Attempt to Compile Passages Related
to All Things in NatureTOTSUGU Kensho 1

Final Lecture

- On the Process of the Formation
of Tsong kha pa's ThoughtFUKUDA Yōichi 33

* * * * *

- Reports 54

* * * * *

Articles

- From Āsvaghōṣa to Vasubandhu: Vasubandhu's Views on the *Saddharmaviṃśatī*
and Āsvaghōṣa's Kāvya as seen in the *Vyākhyāyukti*
and the *Abhidharmakośa*UENO Makio, MATSUDA Kazunobu 51

- The Structural Interpretation of Chapter 5 of the *Pramāṇasamuccaya*
Based on Dar ma rin chen's CommentaryHATANO Kisho 30

- A Translation of the Story of an Angry Monk Who Became a Poisonous Snake
in the *Muktaka* of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*
- Part One: Two Clichés-KISHINO Ryohji 1

PUBLISHED BY
THE SOCIETY OF BUDDHIST STUDIES
OTANI UNIVERSITY
KYOTO JAPAN